



Title	ロシアの穀物輸出国としての発展可能性と制約要因 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	長友, 謙治
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第12507号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65369
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Kenji_Nagatomo_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： 長友 謙治

審査委員	主査	教 授	山村	理人
	副査	教 授	田畑	伸一郎
	副査	教 授	大西	郁夫
	副査	教 授	野部	公一（専修大学経済学部）

学位論文題名

ロシアの穀物輸出国としての発展可能性と制約要因

本論文の成果としては、以下の点をあげることができる。

第一に、ロシアが輸出国となる上での供給サイドの条件、小麦生産の急速な回復が起きたメカニズムを、緻密な定量的分析を通じて解明し、主要な要因を提示したことが大きな成果である。その際、独自の「地域分析アプローチ」を用いて、穀物生産の変化の方向に大きな地域差が存在することを明らかにしているが、農業生産の発展と衰退が並存して進行するというロシア独特の構造を、穀物生産の視点から定量的に分析した類例のない成果となっている。それは、空間的に広大で多様な条件を抱えるロシアのような国での農業分析において、地域分析アプローチが非常に重要かつ有効なことを示す例を示したものである。

第二に、投入財の価格高騰に伴う交易条件悪化のもとで、投入増大による穀物生産の回復が進むという逆説的状況の解明を試み、農業生産者の短期資金制約による過小投入が解消されていくプロセスであることを示し、この問題についての新たな知見をもたらした。また、資金制約の問題と、交易条件の変化、金融、農業組織の変化、政策の問題を関連させて総合的に分析しており、説得的な論証とすることに成功している。さらに、上記のプロセスによる生産回復が現在ではほぼ限界点に到達しており、今後、穀物輸出国として発展する際の大きな制約要因になることが示唆されるなど、予測面にも結びついた成果ともなっている。

第三に、穀物輸出の需要サイドの分析にも踏み込み、特に国内畜産の回復と穀物輸出の発展という一見すると背反するような現象、政策的にも整合的とは言えないプロセスが同時期に進行したことの根拠を解明した点があげられる。また、畜産と穀物生産を含む需給分析を行うことで、政策を変数とする将来予測の可能性を切り開くものともなっている。

以上のように、本論文は多くの面でオリジナリティのある試みを行い、新たな知見を生み出すものとなっており、詳細な統計資料を利用した緻密な分析と政策や制度に関する丹念な調査を結びつけ、全体として整合的、体系的な研究として説得力ある議論を展開するものとなっている。

一方、審査を通じて、本論文に残るいくつかの問題点も明らかにされた。緻密な定量的分析の部分に比べ、「定量的に把握できない部分」についての論述は十分なものとは言えず、特に、農業組織に関する分析・考察の部分に物足りなさがあるといった指摘がなされた。しかし、それは本論文の達成した成果を損なうものというよりも、残された課題として、今後の研究による解決・改善が可能なものである。

以上の審査結果から、本審査委員会は全会一致で学位申請論文が博士（学術）の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。